

〈課題研究論文〉

カント教育論の展開と現代的意味

跡見学園女子大学

山口豊一

1. 問題と目的

現在進めている新学習指導要領の全面実施にあたって、次の4点が強調されている⁽¹⁾。第一に、新学習指導要領の趣旨である知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことである。そして、「確かな学力」として、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決させるために必要な「思考力、判断力、表現力等」を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことである。第二に、国語、社会、数学、理科、外国語等の授業数の増加が図られたことである。このことは、これらの教科等において、基礎的・基本的な知識及び技能の習得とそれらを活用する学習活動の充実をねらいとしたものである。第三に、国語をはじめ各教科等における言語活動の重視である。このことは、言語活動が、論理や思考などの知識活動やコミュニケーション、感性・情緒の基盤となるものであり、児童生徒の思考力、判断力、表現力等を育む有効な手段であることによる。第四に、道徳教育の充実である。道徳の時間を要として、学校の教育活動全体を通じて道徳教育を行うこと及び各教科等において道徳の時間との関連を考慮することが明示されている。

つまり、基礎的・基本的な知識及び技能に基づいた思考力、判断力、表現力等からなる「確かな学力」の向上と「道徳教育」の充実が叫ばれているのである。

このような教育改革の中、子どもをめぐってさまざまな問題が起こっている。不登校、いじめ、暴力行為などの問題行動の深刻化は、学校が子どもにとって楽しい、安全な空間でなくなっていることを示している。道徳教育の充実は、これらの子どもたちの苦戦への対応の一手段として掲げられたと思う。

さて、本論では、以上のような教育改革の背景を踏まえ、カントの教育論の特に道徳教育論の視点から、その現代的意味を検討する。

2. カントの生涯と学説

カント(1724-1804)の生涯は実に人間探求の生涯であったといえる。彼は『純粹理性批判』⁽²⁾において「私の理性のあらゆる関心(思弁的関心ならびに実践的関心)は、次の三つの問いにまとめられる。1, 私は何を知りうるか。2, 私は何をなすべきか。3, 私は何を望んでよいか。」(K.d.r.V.S.540)としている。また『論理学』(1800)においては、「この世界公民的意味における哲学の分野は、次の問いに帰着せしめられる。(1)私は何を知りうるか。(2)私は何を為すべきか。(3)私は何を望んでよいか。(4)人間とは何であるか。第一の問いに答えるものは形而上学であり、第二の問いには道徳が、第三の問いには宗教が、第四の問いには人間学

が答えるのである。しかし、これら総ては人間学に数えられるであろう。何となれば、初めの三つの問いが最後の問いに関係するからである。」(Logik. S. 343) と述べているように、カント哲学は最終的には「人間学」に結集するといつてよい。

3. カントの教育論における自然的教育と実践的教育

(1) 自然的教育 (physischen Erziehung)

カントの『教育学』⁽³⁾は、「人間は教育されなくてはならない唯一の被造物である。」(Päda. S. 457) で始まり、カント哲学の中でかなり重要な位置を占めるとみることができる。ここでは、カントの人間学の自然素質 (Nature) との関連において考察する。

カントは『教育学』の中で、教育学または教育論は自然的か実践的 (道徳的) かであるとする。そして、「自然的教育とは、人間にも動物にも共通な教育、換言すれば保育である。実践的ないし道徳的教育とは、自由に行為する存在者のような生き方ができるよう人間を陶冶するところの教育である。」(ibid. S. 469) とし、さらに「自然的教育と道徳的教育とは、前者が生徒にとって受動的であり、後者が能動的であるという点で区別される。」(ibid. S. 487) としている。

自然的教育とは、人間の動物性の素質に関わるものであり、『人間学』⁽⁴⁾の生理学的見地における素質、『宗教論』⁽⁵⁾における生物としての人間の動物性の素質に関わる教育であるといえる。そして、カントが、自然的教育の機能として、先ず第一に上げているのは、「養護 *Wartung*」である。動物は飼育される必要はあるが養護の必要はない。なぜなら、動物はいくらかでも能力を得さえすれば、本能 (Instinkt) に従ってすぐにそれを規則的、合目的に、つまり自分の害にならないように、素質を使用することができるからである。だが人間の幼児はそうはいかない。幼児には両親の配慮としての養護が必要となる。カントによれば、「養護とは、つまり幼児がその能力の危険な用いかたをしないように、両親があらかじめ配慮することである。」(ibid. S. 457)、なお養護は幼児の能力を積極的に開発するのではなく、むしろ両親またはそれに代わる者が幼児を危険から護るための配慮であり、従ってその機能的性格において、極めて消極的否定的な意味における教育であるといえる。

自然的教育の第二の機能は、「訓練 *Disziplin*」である。訓練はカントによれば、「訓練または訓育は、動物性を人間性にかえる。」(ibid. S. 457) のである。また「訓練は、人間がその動物的衝動により、人間の本分つまり人間性からそれることのないように予防する。」(ibid. S. 458) という役割をもっており、それは人間の動物的衝動にできるだけ距離をとることを意味し、人間の自然素質の展開に障碍となるものを抑制する機能である。

自然的教育の第三の機能は、「教化 *Kultur*」である。カントは、「人間は、教化されなければならない。教化は、教示と教授を含む。それは練達性の獲得である。」(ibid. S. 464) とする。そして「練達性とは任意の目的すべてに対して十分な能力をもつ。」(ibid. S. 464) とされる。またカントは、「自然的教育の積極的な部分は、教化である。人間はこの点で動物と区別される。」(ibid. S. 479) としている。すなわち、教化の目指すものは練達性の獲得であり、人間が自分の

目的を達成する際に要求される技術能力を得る機能である。

さて以上のように、カントは自然的教育の機能を大綱的に見れば養護、訓練、教化の三つに分類しており、この自然的教育の特質は、養護、訓練に関しては受動的であり消極的否定的であるといえるが、教化に関しては自然的教育の中では積極的部分とされる。なお養護、訓練が消極的否定的であるからといって重要ではないとは言えないことは注意しておかなくてはならない。カントは「訓練をなおざりにすれば、教化をなおざりにするより大きな害ある。」(ibid.S. 459)としており、この養護、訓練が消極的否定的であるということは、むしろ人間の生理学的素質(動物性の素質)に関わるものだからであり、それは生物としての人間における基礎的・基本的生活に関わる教育であって、この基礎的教育が人間教育の土台をなしているのである。従って、この消極的、否定的、自然的教育が、次の実践的教育を可能にする前提であると考えられている。

ところで自然的教育は、先述のように動物性の素質に関わるものであり、動物性を人間性に変える機能を有するのである。けれども、ここで見落としてはならないのは、カントが自然的教育の積極的な面に第三の機能として教化を当て、それは練達性の獲得を目指すという点で動物と人間とを区別していることである。このことは自然的教育が、動物性の素質に関わるという論点から矛盾するようにみえるが、カントは教化を教示(Belehrung)と教授(Unterweisung)とに分けることにより、前者を動物性の領域に後者を人間性の領域に当てているのであって、この自然的教育が動物性から人間性への移行領域にまたがっていることを示している。つまりカントによれば、教化に含まれる後者の教授は、人間性の素質(『宗教論』)及び技術的素質(『人間学』)に関わる練達性と重なるのである。従って自然的教育より高次の次元における実践的教育の領域に属するとされているのである。

(2) 実践的教育 (praktischen Erziehung)

実践的教育は、先述の自然的教育が人間の動物性の素質に関わるのに対して、人間の自然素質の中の理性的素質に関わるものである。つまり、『人間学』の(広義の)実用的見地の技術的素質、実用的素質、道徳的素質、また『宗教論』における人間性の素質、人格性の素質に関わる。

カントによれば、実践的教育には、(1)練達性(Geschicklichkeit)、(2)世才(Weltklugheit)、(3)道徳性(Sittlichkeit)が属する(Päda.S. 496)。つまり実践的教育は、まず第一に練達性に関する学課的機械的陶冶から成り立ち、従って教授的であり、第二に伶俐に関する実用的陶冶から成り立つ。さらに、第三に道徳性に関する道徳的陶冶から成り立つ(ibid.S. 469)。

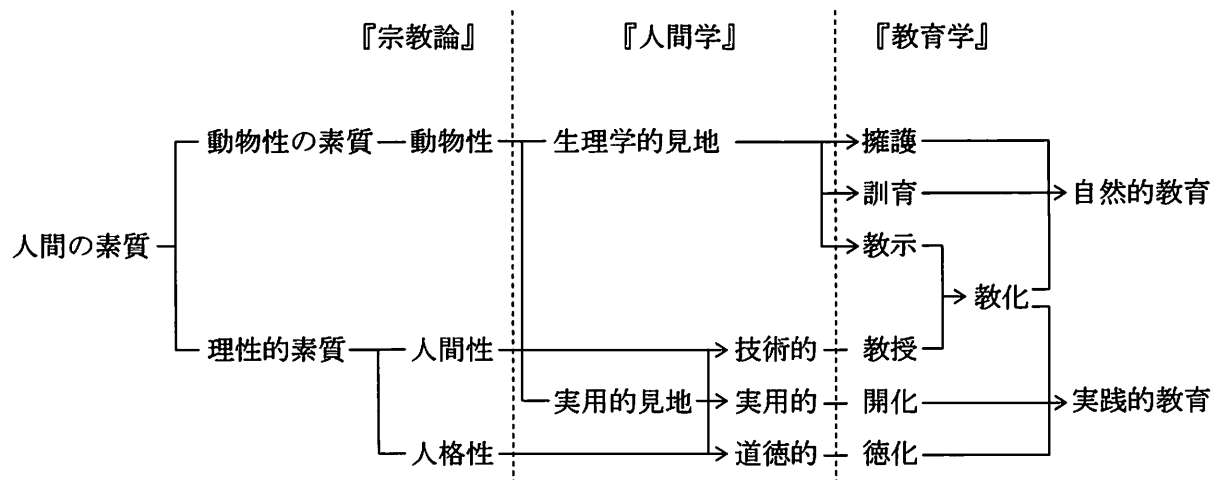
さて、実践的教育の機能としてカントがまず第一に上げるのは「教化 Kultur」である。そして、これは自然的教育の機能にも当たっていた。既に、自然的教育の論述でみてきたように、教化は教示と教授とを含み、練達性の獲得であり、とくに教授は練達性に関わる学課的陶冶に関わるのである。人間の自然素質との関連からすると、『人間学』における技術的素質、『宗教論』における人間性の素質に関わるのである。このことは、教化の二義性を意味するものであった。すなわち、先述のように自然的教育における教化は教示であり、実践的教育での教化は教授ということであって、教化の概念は、人間の動物的素質に関わる教示、理性的素質に関わる教授との

二領域にまたがっているものとして理解できるのである。

実践的教育の第二の機能は、「開化 Zivilisierung」である。「人間はまた怜悯になり、人々とうまくゆき、人々に愛せられ、また信用を得るように心がけなければならない。このために、開化と呼ばれる一種の教化が必要である。」(ibid.S.464)。従って、開化は世才、怜悯に関する実用的陶冶に関わり、『宗教論』における人間性の素質(『宗教論』における人間性の素質は、『人間学』における技術的素質と実用的素質の二者を含んでいる)を発展させる機能である。

第三の機能は、「徳化 Moralisierung」である。「我々は、徳化に心がけなければならない。人間はあらゆる目的のための練達性を備えているばかりでなく、よい目的だけをえらぶような心術をも獲得しなければならない。よい目的とは、万人によって必然的に是認されるような、そしてまた同時に万人の目的でもありうるような目的である。」(ibid.S.465)とされる。徳化は、人間の道徳性における道徳的陶冶に関わり、人間の自然素質の『人間学』における道徳的素質、『宗教論』における人格性の素質を発展させる機能である。

以上のみてきたように、カントにおいては実践的教育の機能は三つに分類され、また自然的教育が受動的性格をもっているのに対し、実践的教育は能動的性格を有し、人間の自然素質における理性的素質に関わるものである。ここで、人間の自然素質と教育の機能との関係をまとめると次のようになる。



4. 道徳は教育できるか

カントは『教育学』において「よき教育こそは、まさに世界のすべての善が生ずるもととなるものである。人間の中に潜む萌芽が、ますます発展させられさえすればよいのである。なぜなら、人間の自然素質の中には、悪への根拠は見いだされないからである。自然を規則で縛らないということ、それだけが悪の原因なのである。人間の中には善への萌芽だけが潜んでいる。」(Päda. S. 463)と述べている。カントは、よき教育によって善なる世界が可能となるとしており、教育に対する信頼を寄せている。また、人間の自然素質の中には善への萌芽だけがあり、悪への根拠は見いだされないとしている。

けれども、カントは「自然的によく教化され、精神はよく陶冶されていても、道徳的教化に欠

けている人は、やはり悪い人間である。」(ibid.S. 482)と述べ、道徳的教化に欠ける人間を「悪人」としている。そして「人間の場合には自由⁽⁶⁾への性癖があるので、その未開性を洗練する必要がある。」(ibid.S. 458)としており、人間の未開性の中に性癖を見ているのである。

つまり、「人間は生まれつき道徳的に善であるか、それとも悪であるか。そのどちらでもない。」(Relig.S. 502)のである。「なぜなら、人間は生まれつき決して道徳的存在者ではないからである。人間は、その理性が義務と法則の概念にまで高められたときにだけ、道徳的存在者となるのである。」(ibid)。人間の自然素質の中には「善への萌芽」だけが潜んではいるが、「人間は元来あらゆる悪徳への刺激を内包している。」(ibid)のであり、「理性は反対の方向に駆り立てるけれども、人間は傾向性と本能をもっていて、それらに刺激される。」(ibid)のである。そのため、「人間は徳によってだけ、従って自制心に基づくことによってだけ、道徳的に善となりうる。」(ibid)のである。

ところで、カントは『教育学』において極めて具体的に「徳論」を展開している。カントによれば、「徳は功績の徳であるか、単に責任の徳であるか、それとも純粹の徳であるかである。第一の徳には、寛容(報復・安逸および貧欲の自制における)・慈善・克己が属し、第二の徳には、公正・礼儀および温和が属し、最後に第三の徳には、実直・しとやかさおよびつつましが属する。」(ibid)のである。つまり、カントにおいては、「寛容・慈善・克己・公正・礼儀・温和・実直・しとやかさ・つつましさ」を人間における徳と考えており、人間はこの徳によってだけ道徳的に善となることができると考えられている。

では、反対の「悪徳」はどのように考えられているのだろうか。カントは、「悪徳は、悪意のそれであるか、卑劣のそれであるか、偏狭のそれであるかのどれかである。第一の悪徳には、嫉妬・恩知らずおよび他人の不幸を喜ぶことが属し、第二の種類悪徳には、不正・不誠実(虚偽)・財貨の浪費・健康の浪費(不摂生)および名譽の浪費におけるだらしなさが属する。第三の種類悪徳は、冷酷・りんしょく・怠惰(柔弱)である。」(ibid)と述べている。つまり、カントは人間の傾向性や性癖によって生ずる「悪徳」を、以上のように「徳」の場合と同様に、三つの種類に分類し、より具体的に考えているのである。

結局、カントは人間は生まれつき道徳的に善でも悪でもなく、嫉妬や不正などの性癖による悪徳を克服し、寛容や実直などの徳を得ることによって、換言すれば、人間の理性が義務と法則の概念にまで高められたときにだけ、道徳的に善となり、道徳的存在者となり得ると考えているのである。

従って、先述のように、人間の自然素質は善への根源的素質と言われ、本来善へと向かう可能性を秘めた素質であって、それ自体根源的に善へ向かうという可能性としての目的を有している。よって、それが本来の姿に沿って遂行されていく限り、そこには何ら問題はないといってよい。けれども、人間がまさに人間であるがゆえに、善への可能的素質として、逆に常にその目的に反する可能性を同時に持っているということも事実なのである。

カントは『人間学』において、「動物性はたしかに純粹な人間性よりも早く発現し、また全く一層強力である。そして、その馴れた家畜は弱めることによってのみ人間にとって野生の動物より

も有用なのである。我意は常に彼の同胞に対して敵意をあらわそうとしており、そしてあらゆる時に、絶対的自由を要求し、自分一人だけでなく、本来自己と同様である他者をも支配しようとする。このことはすでに極く小さな子供においてすら認められるところである。それは人間における自然が道徳性とその法則から発し、理性が指定するように、その上に築かれた合目的的教化へと進んでいくのではなくて、教化から道徳性へと進んでいこうとするからである。ここから転倒した反目的的傾向が不可避免的に生ずる。」(Anthro. S. 327-328) と論述している。つまり、人間の動物性は人間性よりも「早く、強く」発現し、人間の「禽獣的悪徳」(Relig. S. 165) (『宗教論』) を招くのである。だが、人間はさらに人間性に至っても嫉妬、敵意などの文化の悪徳を招く存在なのである。

すなわち、常に反目的的な傾向性は潜んでおり根絶できないという点で、人間は道徳的存在者としての可能的な権利をもつ訳であるが、やはり人間の自然素質自体はそれぞれ善へと向かう可能性をもち、またもつのでなければならない。善へと向かうことによってはじめて、人間の自然素質はまさに人間の自然素質としての意味を受け取ることになる。従って、それぞれの人間の自然素質に相応した教育の機能は、その自然素質が、目的に反することのないように導くことを信条としている。

さて、反目的的であるということは「悪」へと向かうことであり、それは常に人間の自然素質の本来の性格に反することであって、カントは我々人間が根絶することのできない性格を持つ「根源悪」(Das radikale Böse) の出現を説いている。すなわち、彼は『宗教論』において、「人間本性の内にある善への根源的素質」に対して、「人間本性の内にある悪への性癖」について述べている。性癖は素質とは異なり、「人間自身によって招かれたもの」(Relig. S. 168) として考えられているのであり、人間の自然素質は善への自然素質であって、悪への自然素質ではないが、すでに明らかなように、それ自体は善である自然素質ではなく、善に対してまだ可能的であるにすぎない素質である (ibid. S. 185)。そこで、悪への性癖とは、まさにこの善への人間の根源的素質を悪へと向かわせるものにほかならないのである。⁽⁷⁾

カントは先述のように、悪への性癖を三段階に分けている。つまり、第一に「心情の脆さ」、第二に「心情の不純」、第三に「心情の悪癖」である (Päda. S. 168)。そして、第一段階と第二段階の悪への性癖は、最後の「心情の悪癖」へと集約される。つまり、人間本性の「脆さ」と人間本性の「不純」とが結び付き、結局は道徳法則が唯一の動機であることが無視されることにおいて、この悪は根源的である (ibid. S. 176)。すなわち、「道徳的秩序の転倒への性癖が人間の内に存するならば、人間の内には悪への自然的性癖が存することとなる。そしてこの性癖は、それが結局自由意志の内にも求められなければならない、従ってそれ自身に責任が帰せられるがゆえに、道徳的に悪である。」(ibid) とされる。ここで明らかなように、悪の根源は感性や自然的傾向性に求められるのは誤りであり、また道徳的に立法する理性の腐敗の内に置かれることもできない。この根源悪は、一切の格律の根拠を腐敗させるところに存するのである。

カントによれば、我々人間が自由であるとされるのは、我々が善意志にもとづいて、換言すれば、善なる格律のもとに行為することであるが、それに先だって道徳法則を自らの格律として選

ぶか選ばないかという選択意志の自由による行為がなされることになる。実際にこれは、現に陥っている状態から、つまり悪の三段階を逆行することを意味している。すなわち、現に陥っている「悪癖」の状態から、「不純」の状態へ、そして「脆さ」の状態へと上昇することである。ここに、カントにおいて「根源悪」克服の可能性があるのである。我々の現実の生活においては常に、この上昇運動を繰り返しているといつてよい。⁽⁸⁾ 完全に絶対的な善の状態に留まることは、現実の人間にとっては不可能であり、人間は絶えずこの道徳的完全性に向かって努力する存在にすぎないのである。

ここにおいて、カントのいう根源悪の思想と人間性の善への根源的素質の主張が意味をもってくる。カントは、人間は本来善へと向かう存在であり、つまり悪の原理に対して善の原理が勝利をおさめる存在であると考えている。従って、人間は善へと向かって努力することができるのであるが、これは容易になされる訳ではない。先述のように、人間は善への自然素質を有すると同時に不可避的な絶つことのできない根源的な悪への性癖を合わせ持っているからである。ここに教育の意義があると言える。従って、徳化は価値的段階としては最高の段階であり、最後に論じられるものであるが、教育場面においては最初から意図されていなければならない。カントによれば、「道徳的陶冶は、人間自らが洞察すべき原理に基づくものである限り、最後の陶冶である。けれども、それが常識に基づくものにすぎない限り、そもそも最初から、そして自然的教育においても即刻考慮されなければならない。」(ibid. S. 470) のである。つまりカントにおいては、人間は自らの有限性を認めつつ、常に道徳的存在者であるために、言い換えれば、自由な存在者として真に自らの善意志に基づいて行為し、絶えず善なる存在者であるために、無限の努力をすることが必要とされる存在であると言える。

このようにみると、カントは『教育学』において「人間の善への根源的素質」と「根源悪の思想」とを展開し、かなり具体的な「徳論」を説いているのであるが、これは、当然『宗教論』の論述、さらに『原論』⁽⁹⁾、『実践理性批判』⁽¹⁰⁾における悪の論述と一致するものであり、人間が常に「自然」に支配されつつも、「自由」であらざるを得ない存在であることの現れである。換言すれば、人間存在自体が「英知的」と「感性的」との二重性をもつものであるがゆえに、常に感性に支配されつつも理性の立てる法則に従う「べき sollen」存在なのである。

5. カント教育論の現代的意義

カントは、『原論』及び『実践理性批判』において道徳哲学を展開し、そこでは人間の理性の命令(命法)を二つに分け、およそ命法は、仮言的か定言的かのいずれかであるとし(Grund. S. 271)、人間が従うべき普遍的道徳法則として、「汝は、汝の格律が普遍的法則となることを、当の格律によって、同時に欲し得るような格律に従ってのみ行為せよ。」(ibid. S. 279) という定言命法を導き出している。すなわち、彼は条件を前提とする「実質」に関わる仮言命法(sein)が普遍性を持ち得ないために、実質を捨象した、無条件の「形式」的定言命法(sollen)を抽出し、形式倫理学を打ち出す。この点が、その後の倫理学者、とくに現象学の立場に立ち「実質的価値倫理学」を提唱する M. Sheler (1874-1928) によって形式主義と批判されることになるのである。

ところがカントの教育論は、必ずしも形式主義に陥っているとは言えない。ここでは、教育の機能が具体的な人間を対象とするために、教育学は実質的な内容をもつ学問であらざるを得ないのであり、カントの道德哲学におけるように善の普遍性を導き出すために不純な実質的内容を捨象し、純粹な形式だけを抽出する抽象的理想的学問にはなっていないのである。

なるほどカントの教育論においても、教育が自然的教育と実践的教育との二元に分けられており、これはカントの道德哲学の二元論と同じであり、またカントの哲学全体形をなしている「自然」と「自由」との二元論の展開であるといえる。つまり本論において吟味してきたように、カントはこの路線に従って人間本性の自然素質論においても、究極的には動物性の素質と理性的素質との二元論を踏襲しているのであって、このようにして『教育学』においても、この二つのそれぞれの異なる次元に対応させて動物性の素質には自然的教育を、理性的素質には実践的教育を関わらせようとする点で、二元論の展開であることには変わりないといえる。

けれども、現実の具体的な人間教育論においては道德哲学にみられたように絶対性と普遍性をもつ「なすべき」義務を究明する原理的理想的学問ではあり得なかったものであり、ここでは教育という実質的な営みが、まず第一に人間の自然素質における動物性に具体的にどう関わるか、また第二に人間性における練達性の獲得や世渡りの術としての世才および伶俐にそのような教育がどう関わるかという具体的実質的な教育論として展開されているのであって、養護、訓練、教化、開化、徳化という自然的教育から実践的教育への教育の機能が具体的な連続性において捉えられ、かつ重層的に積み重ねられなければならない教育理論になっているのである。

例えば、既に述べておいたようにカントは「訓練」が教化の基礎をなすと説いており、また実践的教育においては練達性の陶冶は第一の陶冶であり、伶俐はすべての練達性を前提とするとか・・・・・道德的陶冶は、最後の陶冶である (Pada. S. 456) と主張していることから、自然的教育と実践的教育との連続性と重層性が強調されているのであり、またカントの教育学においては道德哲学における仮言命法は定言命法へのステップを成しており、連続的重層的に捉えられているのである。だがさらに注意すべきことは、カントの教育論は単に自然的教育から実践的教育へと連続性をもって展開されているという点に留まっではないことである。「道德的陶冶は・・・・・そもそもの最初から、そして自然的教育においても即刻考慮されなければならぬ。」 (ibid. S. 470) と強調するように、自然的教育における最初の養護と実践的教育における最後の徳化とが、有機的全体として統合されているのである。

以上カントの教育論を道德教育論 (徳化) の関連から考察してきたのであるが、教育の対象である人間の動物性の素質と理性的素質とは基本的には異なった方向に向かう自然素質であり、それらの間には次元的な相違が依然として存在し、両者にはそれぞれの独立の原理があり、いずれからも越え出る可能性のないことを認めなくてはならない。にも拘らず、現実の具体的生きた人間自体は、とりわけ生きた全体としての現実存在は、一個の主体的存在であり、内に超越を含むようなパラドクシカルなものであって、生きた全体として総合され、総観されることを要求している。このようにみると、カント哲学における二元論が、教育論においては二元論のまま放置するのではなく、あるいは彼の道德哲学におけるように仮言的実質的内容を切り捨てて、定言的

形式の勝利による「支配の一元化」を目的とする二元論でもないといえるのである。言い換えれば、この異質な両者を、むしろ生きた現実を織り成す二本の縦糸、横糸と見なし、人間の現実をこのような大きな振幅と力動性において捉え、生きた具体的全体としてあくまでそれらの絡み合いの中で理解し、そして有機的全体的な視点からの統合的な調和的人間形成に関わる教育論の模索のなかに、カントは教育の課題の解決を求めているとみることが可能である。

以上の論から、我々は人間存在自体が絶対否定性の否定の運動⁽¹¹⁾を本質とする存在であることに焦点を当てることによって、カント教育論の弁証法的構造⁽¹²⁾を敢えて浮き彫りにしてきた訳であるが、このようにみると、カント『教育学』において、道德教育の重要性を説いており、そもそも幼児期から、つまり自然的教育においても配慮されるべきであると述べている。現代の幼児期からの教育（徳育）の重要性の強調と一致する。家庭教育において、既に道德教育が配慮されなければならないのである。このようにみるとカント『教育学』のなかに、全体的有機的構造のなかでの統一的理解を、つまりカント教育論の原型をみることができると考える。カントの究極のテーマは「人間とは何か」であったが、まさしくカント『教育学』はこのカント「人間学」の総合的な精華とみることができると考えられる。そしてそれが、教育一般論に留まらず、道德教育論に妥当することは、カントの道德的陶冶（徳化）の論述から明確である。

註

- (1) 文部科学省 2008 中等教育資料 ぎょうせい p.10-13
- (2) I. Kant: Kritik der reinen Vernunft, 1781, I. Kant Werke (Cassirer), Band 3, 以下 K. d. r. V., 『純粹理性批判』と略記する。
- (3) I. Kant : Über Pädagogik , 1803 , I. Kant Werke (Cassirer), Band 8 以下 Pada. , 『教育学』と略記する。
- (4) I. Kant : Anthropologie in pragmatischer Hinsicht, 1798, I. Kant Werke (Cassirer), Band 8 以下 Anthro., 『人間学』と略記する。
- (5) I. Kant: Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft, 1793, I. Kant Werke (Cassirer), Band 6 Relig., 以下『宗教論』と略記する。
- (6) L. E. Borowski : Darstellung des Leben und Charakters Immanuel Kant , 『カント生涯と性格』 山本英一訳 弘文堂 1950 p.137 参照
- (7) この思想をカントに自覚させるに至った契機は、悪を自由との関わりにおいて積極的に取り上げた宗教論における「根源悪」の思想であると考えられる。
- (8) 小倉志祥 1972 『カントの倫理思想』 東京大学出版会 p. 416
- (9) I. Kant : Grundlegung zur Metaphysik der Sitten , 1785, I. Kant Werke (Cassirer), Band 4 以下 Grund., 『原論』と略記する。
- (10) I. Kant: Kritik der praktischen Vernunft, 1788, I. Kant Werk (Cassirer), Band 5 以下 K. d. p. V., 『実践理性批判』と略記する。

(11)和辻哲郎 1979 『風土』岩波文庫 p.15 参照

(12)H. H. シュライは「相補正 Komplementarität」という言葉で弁証法を説いているが、教示されるところが多い (H. Schrey :Weltbild und Glaubeim 20. Jahrhundert ,1955, S.62 ff.)。

(*) 訳文は理想社版「カント全集」によったが、一部自訳による。

(*) なお、本論文は『カント人間観と教育の構造—「教育学」に現れたカント根本思想とその教育論的展開—』(山口豊一,平成3年度茨城大学大学院教育学研究科修士論文)の一部を基に、道徳教育論の観点から考察を加え修正加筆したものである。